

## 勿凝学問 93

あれっ？ また不注意でミスってしまった  
世の中で最も苦手なことはファックスによる記事のチェック？

2007年7月11日  
慶應義塾大学 商学部  
教授 権丈善一

今日の午後、ある新聞の記者さんとインタビューなの雑談をして遊んでいると、「今朝の新聞で、医療制度改革とあるのは、医療供給を改革するということではなく、医療費を増やし医師数を増加するということですよ」と尋ねられて、当たり前じゃないかと思って、「うん、そうだよ」と答える。だいたいもって、僕が、＜改革＞なんて言葉を使うはずがなく、＜医療問題＞と言っているだろうと思って、彼が帰った後、こっそり見直してみたら、＜医療制度改革＞と書いてあった（冷汗）。

また、やってしまったか（涙）。どうも僕は、ファックスで送られてきた文章の見直しをとっても苦手としているようで、ほぼ、確実にチェックミスをするようなんですよね——自分でも原因不明。悲しいかな、文章の推敲というのはパソコンをながめながらやるというスタイルが染みついているからでしょうかね、申し訳ない。ということで、これからはみなさん、原稿はファックスではなくてメールで送ってきてくだされば、心よりありがたく存じます。 > 記者さんたち（漫画は除く？）

ということで、ちゃんと読み直してみたら、あらあら。

【選択の視点 07参院選】(中) 国のかたち かすむ論議

2007年07月11日 産経新聞 東京朝刊 1面

「国政選挙をシングルイシュー（1つの争点）でやるというのは、郵政選挙が特異な例だ。政党が国政選挙で訴えることは、多岐にわたるのが当たり前だ」

1カ月前の6月6日、訪問先のベルリン市内で安倍晋三首相は記者団にこう指摘していた。しかし、その思いとは裏腹に、参院選の争点は年金記録紛失問題への対応に加え、赤城徳彦農水相の事務所費問題で再び「政治とカネ」の問題が浮上し、「国のかたち」という大きなテーマになかなかたどり着けない。

戦後60年以上がたち、日本社会はさまざまな面で制度疲労を起こしている。厳しさを増す国際情勢へも備えなければならない。憲法、安全保障、教育、税制、医療…と本来、議論を尽くすべき論点は少なくない。

今月5日に閉会した通常国会を民主党は当初、「格差是正国会」と名付け、首相は「教育再生国会にしていきたい」と抱負を語っていた。ところが格差も教育も、年金記録紛失の衝撃の前にかすんだ。

「小泉（純一郎前首相）さんにもできなかった教育基本法改正ができて、今国会は教育国会だなんてわんわん言っていたのに。（教育再生関連3法が）何となくすっと通ったら、とたんに関心がなくなった」

麻生太郎外相は10日の会見で、こう皮肉った。



最大の争点となっている年金問題で、与野党はどう対決すべきなのか。社会保障制度に詳しい権丈（けんじょう）善一慶応大教授は「なすべきことに関する議論はもう1カ月前に終わっている。あとは実行を待つだけだ」と、年金問題はすでに解決に動き出しており、政争の具にすべきではないとの見方を示す。

さらに「国のかたちを決め、国の進路を選択することにも利用できるせつかくの参院選が、年金記録未統合の話で終わってはもったいない。政府・与党の案で対策は出尽くしている。年金の陰に隠れて、医療問題制度改革やこれを解決するための費用負担問題への取り組み税制論議が先送りされては取り返しがつかなくなる」と語る。

年金問題で、安倍首相は「いま私たちが出している対策以外にないと確信している。野党はこれに代わる対案を出していない。『もっと早く出すべきだった』『期限内にできるのか』という指摘しかない」と主張する。一方、民主党の小沢一郎代表は1日の安倍首相との党首討論で、今回の参院選を「年金信任選挙」と位置付け、「日本という国、今の政府は国民にとって信じるに足りるのかが問われている」と強調した。

昨晚の、原稿へのコメントでは、「国の進路を選択することにも利用できるせつかくの参院選・・・」——このあたりの文章作りに夢中になりすぎていたんですよ。

いかなあ、海よりも深く反省。

でも、「国のかたちを決め、国の進路を選択することにも利用できるせつかくの参院選が、年金記録の話で終わってはもったいない」は、かなり気に入ったフレーズになりそうです。どうもありがとう。

それと、次のようなことを話したというか、読み上げたことは、お互い秘密にしておきましょう（笑）。

社会保障の専門家として論じれば、今回の選挙は、重要な問題には面白いほどにまったく触れないという、いつもながらと言えいつもながらの情けない国政選挙だと言える。この国の人たちは、今回も国の進路を選択する機会を喪おうとしている。

皆が大騒ぎしている年金記録問題については、なすべきことに関する議論はすでに一月前には終わっている。あとは実行を待つのみである。野党は年金を政争の具にして票を伸ばそうと目論んでいるが、年金といえばメディアがすぐに飛びついてくれるので、彼らがそうした戦略をとるのは仕方ないことだとは思う。しかし野党の出す年金改革案は、年金と呼べる代物ではなく、メディアの多くはそれを知りながら、年金不安を煽って政局を演出して愉しんでいるのが今日の状況である。

選挙前のメディアは全体がワイドショー化し、冷静さを失って質を落とす。新聞も例外ではない。こうしたなか、投票をするための判断材料をメディアに求めるしかない有権者は、大きく判断を狂わされることになる。ある程度世の中を見わたすことができる人たちには、ある面、諦めモードで選挙直前を過ごしてもらいたいだろう。

少なくとも言えることは、今のような解決済みの不毛な年金論争に翻弄されて投票先を決めるようでは、この国が本当に解決を考えなければならない医療問題、これを解決するための費用負担論議が先送りされて、取り返しのつかない状況になるおそれがあるということである。もっともこの国の国民にはそうした将来もふさわしいのかもしれない。

ここでは、医療に関わりなく生きている人たちに医療問題の深刻さを理解してもらうのは無理があるから、およそ二〇〇万人の医療従事者に対してのみ言っておきたい。

みなさんは毎日の生活の中で医療政策の矛盾を肌を感じながら過ごされていると思う。少なくともみなさんは、政争の具と化している年金を判断材料として投票先を決めてほしくない。この国で、せめて医療従事者には、各党のマニフェスト、これから出されるかもしれない政策公約を冷静に見比べてもらいたい。そして今日の医療崩壊を真摯に受け止め、医療崩壊を阻止するためには国民の負担増も止むなし、早急の医師数増は不可避とする姿勢を示す政党を選んでほしい。二〇〇万人のあなたたちの票が、いずれはこの国の将来を救う道筋を切り開いていくことになる。

60年代の学生運動の時のように、再び医学部・医療関係の人たちが、日本の改革を主導すべき時なのではないかとも思っていたりもする。

なぜ、こういう文章を僕が持っていたのかって？  
他の取材のために準備していたからです（笑）。

それと僕には、世の中はこんなに大変なんだ！という熱い論法は、なんだか向かないんですよね——この期に及んでも分かってない人は、どうせ言っても分からないんだから放っておけばいい。どうせ言ってもわからないという傾向は、特に医療において強くあらわれる。だから、分かる人たちだけでやりましょう、という論法になってしまうんですよね。